

1 クリューバー・バレラ染色における  
2 クレシル紫液の検討

3  
4 小木義貴 小野寺清隆 鈴木学 米川球恵  
5 山田千裕 岩井優 大木昌二  
6 (千葉大学医学部附属病院 病理部)

7  
8 【はじめに】クリューバー・バレラ染色 (KB 染色)  
9 において、従来より使用してきた MERCK 社製クレシル  
10 紫が供給停止となり、代替品としてクレシル紫・  
11 酢酸塩を使用したところ、染色性の変化・不安定化  
12 を経験した。クレシル紫は液の pH によって染色性が  
13 変化することから、染色液調整の際に添加する 10%  
14 酢酸の量によって pH を変化させ、クレシル紫・酢酸  
15 塩液の至適条件の検討を行ったので報告する。

16 【材料・方法】15%ホルマリン固定、パラフィン包埋  
17 された大脳の切片 (6  $\mu\text{m}$ ) を用いた。  
18 KB 染色の手順はルクソールファースト青染色後、分  
19 別までは成書に従い、クレシル紫・酢酸塩液を従来  
20 法 (10%酢酸 5 滴添加) と、10%酢酸で pH4.0、3.8、  
21 3.6、3.0 に調整したもので 37 /5 分間染色した後、  
22 95%エタノールを用いて分別した。

23 【結果】クレシル紫の色調は、pH3.8 が神経細胞の  
24 核やニッスル顆粒の染色性が最も良好であった。  
25 pH4.0 では過染傾向や大脳皮質への共染を示し、  
26 pH3.6 では共染は無いものの淡染傾向となり、pH3.0  
27 では特に核の染色性の低下が見られた。また、従来  
28 法で調整した場合、pH は 4.0 付近であり、過染傾向  
29 を示した。クレシル紫・酢酸塩は、クレシル紫に比  
30 較して青味が強い傾向がある為、ルクソールファ  
31 スト青染色の分別と併せ、pH を 3.8 に調整すること  
32 で良好な染色結果が得られた。

33 【まとめ】KB 染色に限らず、特殊染色においては色  
34 素・試薬の変更によって染色性が異なることが稀で  
35 はなく、染色性に変化が見られた場合は pH をはじめ  
36 種々の要素を見直す必要があると思われた。

37  
38 連絡先 043-222-7171  
39